

# 研究発表要旨

## 線分の比喩における可知界の区分 ——プラトン『国家』509d6-511e5——

太田 和則

プラトンは、『国家』VI巻509d6-511e5の線分の比喩において、太陽の比喩における「可視界」と「可知界」の区別を引き継ぎ、二つの「世界」のあり方を、特定の比に従って四分割された線分に喩えて説明している。線分の各区間は、その長さに応じて、真実性と明確性の度合いが異なるものを表しており、度合いの低いものを表す順にL1、L2、L3、L4とすると、L1とL2は可視界、L3とL4は可知界を表す。また各区間には、それが表すものの真実性に応じて明晰な、魂の四つの状態が対応し、それらは明晰でない順に *εἰκασία*、*πίστις*、*διάνοια*、*νόησις* である。

L1～L4が具体的に何を表しており、魂の四つの状態がどのようなものであるのかについては、膨大な先行研究が存在するものの決定的な解釈が出ていない。特に盛んに争われているのは、可知界を表すL3とL4、および *διάνοια* と *νόησις* の区分の解釈である。線分の比喩の大部分がこれらの区分の説明に充てられているために、その解釈をめぐる論争からは、比喩の目的そのものについての見解の相違も生まれてきている。

解釈者たちを悩ませているのは、L4が明らかにアイデアを表す一方、L3が何を表すのか判然としないことである。ひとまず伝統的に根強い解釈は、L3が表すものはアイデアでも感覚物でもない「数学的対象」だというものである。また別の解釈は、L3はアイデアの似姿として見られた感覚物を表すというものであり、近年の Smith や Dominick はこれを支持する。しかし、プラトンが比喩において直接的に論じているのは、L4が表すのは哲学的問答法によって探求されるのに対し、L3が表すものは数学的諸学術によって探求されるということである。そのことや、太陽の比喩の冒頭箇所が示唆するのはむしろ、L3とL4はどちらもアイデアを表し、その真実性は探求方法の違いから区別されているということである。こうした解釈は、Murphy や Hackforth などによって既に或る程度説得的に提示されているにも関わらず、その重要性は近年では十分に省みられていない。

本発表では、Murphy、Hackforthらの解釈の妥当性をテキストに基づいて再確認すると共に、この解釈に対して従来指摘されてきた幾つかの問題（e.g. 比喩の幾何学厳密性に関わる）の克服を目指す。またその上で、可知界がもつばら探求方法の観点から区分されていることに着眼しつつ、線分の比喩の目的を考察する。線分の比喩は従来、VII巻の洞窟の比喩以降の議論との結びつきを重視される一方、先の太陽の比喩との関連性をあまり問題にされてこなかった。これに対し本発表では、線分の比喩がアイデアの探求方法を初めて具体的に提示していることに注目し、その基本的な目的は太陽の比喩に始まった〈善〉のアイデア探求の発展にある、ということ論じる。

ギリシア語の動詞組織については、Helmut Rix が述べたものが一般に受け入れられている。それによれば、まず印欧祖語の動詞は一般に 2 つの接辞をもち、これに人称語尾が付加される。第 1 の接辞は文法相と動作態様をまとめて表し、文法相と動作態様には少なくとも不完結相（現在相）、完結相（アオリスト相）、状態相（完了相）、使役相、反復相、願望相の 6 つがある。第 2 の接辞は時称と法をまとめて表し、これによって直説法本時称、直説法副時称、指令法、接続法、希求法、命令法の 6 つを形成する。ギリシア語は、これにいくつかの変更を加えているものの、全体としては印欧祖語の動詞組織をかなりの程度忠実に受け継いでいるといえる。ただし紀元前第 1 千年紀の時点で、これらの接辞によって表される区分のうち、いくつかのものは失われ、いくつかのものでは再解釈が行われた。たとえば指令法、使役相、反復相は、区分としては失われた。たとえば接辞  $-\sigma\kappa-$  を用いる反復相は初期叙事詩などに残っているが、もはや語根からは形成されず、現在幹かアオリスト幹から形成されるようになっており、したがって法に準じて扱われているといえる。いくつかの動詞には  $\gamma\iota\nu\omega\sigma\kappa\omega$  「知る」のように反復相幹が残っているが、これは現在幹を形成するための手段となっている。使役相に由来すると考えられる  $\phi\omicron\beta\acute{\epsilon}\omega$  「恐れさせる」もやはりこれ自体が動詞幹として用いられているので、文法的な手段を用いて語根から使役相が作られるのではなく、語彙化されているといえる。能動態完了は意味の点で変化が起こった。ミュケーナイ・ギリシア語では常に、初期叙事詩でもかなりの程度、またそれ以降でもかなりの動詞において「主語の状態」を表していたが、後に「動作の結果」を表すようになった。さて、ギリシア語で発達した区分には、中動態完了、受動態アオリスト、過去完了などがある。また既存の区分の中にもギリシア語で発達した形態がある。たとえば  $\kappa$  完了や  $\kappa$  アオリストなどである。これらのうち、いくつかのものには関連性が認められる。 $\kappa$  完了と  $\kappa$  アオリストには形態上で一部に一致する点がある。また、中動態完了は能動態完了の意味が「主語の状態」から「動作の結果」に移行していった結果、発達したものだと考えられる。受動態アオリストは意味の上で自動詞であるものがあり、形態上も能動態の人称語尾を用いることと、状態を表す接辞  $-\eta-$  を用いているものがあることを考慮すると、もともと状態を、あるいはある状態になることを表していたと考えられる。これらのギリシア語で発達したものを中心に、形態上の点から、また意味の点から検討し、ギリシア語の動詞組織がどのように変化していったのかを考察するのが本発表の目的である。

### 名前の規約性と類似性

——プラトン『クラテュロス』433c-435d の解釈をめぐって

田中 あや

「名前の正しさ」を探究するプラトンの対話篇『クラテュロス』は、名前の正しさ

を規約に求めるヘルモゲネス説（規約説）と、事物のあり方の表示に求めるクラテュロス説（本性説）との対立を軸に、ソクラテスが両説を吟味・批判する。この対話篇からソクラテスの（そしてプラトンの）見解を引き出すためには、ソクラテスが両説のどの点を受容し、拒否したかを見定めねばならない。しかし、諸解釈は紛糾を極めている。解釈上の争点は主に、「σκληρότης の議論」と呼ばれる箇所<sup>1</sup>の解釈に存する。研究者の多くは、この議論を他の部分から切り離し、文脈を無視して考察してきた。そのため、この議論が抱える難問（以下で詳述）への様々な取り組みも、決定的な解決を与えるには至っていない。

こうした背景のもと、本論は「σκληρότης の議論」と、「割り当ての議論」、「二人のクラテュロスの議論」と呼ばれる二つの先行議論が、或る共通の事柄を論じる三段階の議論をなすという想定のもと、「σκληρότης の議論」を先行議論との関係において考察する。三つの議論で論証されんとするのは「端的に対象を指定するという点で、類似性は全く効力をもたない」ということだ。ここでは「端的に対象を指定する」という名前の指示機能が「事物のあり方を表示する」という名前の表示機能と対比されており、名前と事物の類似性は対象の指示には全く寄与しないというソクラテスの主張を読み取ることが、決定的に重要なのだ。こうした読解は、「σκληρότης の議論」に孕まれる二つの難問への応答を可能にする。第一の問題は、数の名前（435b6-c2）である。先行研究は、数の名前に数そのものとの本性的類似を認める解釈と、いかなる類似も認めない解釈に二分される。これに対して本論は、この問題を「二人のクラテュロスの議論」に遡って考察し、数の名前は、数との本性的類似はもたないが規約的類似を有することを示す。もう一つの問題は、τι（435b5、b8）と προσχρησθαι（435c6）の解釈にある。これらの語の解釈に応じて、ソクラテスの最終的立場が完全な規約主義（Schofield）や柔軟な本性主義（Sedley）とみなされてきた。本論は、これらの語を、端的に対象を指定するという点での規約性の決定的な役割を示す表現として解釈する。

こうした解釈が意味するのは、ソクラテスが本性説を捨て、完全な規約主義者に翻ったということではなく、規約性が主要な役割を担うのは、あくまで対象の指示という点であり、ソクラテスは、事物のあり方の表示という点では類似性の力に重きを置いているということだ。最終的に本論は、名前の規約性と類似性が、それぞれ名前の指示機能と表示機能という異なる役割を担うとする解釈のもと、完全な規約説とも柔軟な本性説とも区別されるソクラテスの見方の重要性に光をあてることを試みる。

#### 前4世紀以降のアテナイ社会における外国人の自己認識 ——墓碑の分析を通じて——

篠原 道法

近年、伝統的に強調されてきたポリスの閉鎖性という論点が見直されつつあり、ポ

リスの柔軟な対応に注意すべきことが指摘されるようになってきた。例えば前 4 世紀のアテナイについて、特に世紀の中葉以降、有力者層に属さない一般の外国人も、穀物供給などによるアテナイへの貢献で頻繁に顕彰を受けるようになっていた事実が注目されている。これは、社会における外国人の役割の、あるいは彼らに対する市民の期待の増大を示しているであろう。そのことで市民団の地位が損なわれるようなことはなかったとはいえ、市民は有用な外国人と積極的に関係を取り結ぶようになっていたのである。

それでは、かかる状況の中で、当の外国人は自らをどのように認識していたのだろうか。上述のとおり、市民が外国人をいかに認識したのかという「市民のまなざし」についての見直しが進む一方で、社会との関係の中で紡ぎ出される外国人の自己認識、言うなれば「外国人のまなざし」の問題については、これまで十分な考察がなされてきたとは言い難い。

この問題について考えるための素材として墓碑に注目したい。墓碑は個人の記念碑であり、そこには被葬者の、あるいは親族・友人の強い思いが込められている。そしてアテナイには外国人の墓碑が多数存在し、前 6 世紀初頭からの約 400 年間で 900 を超える比較的豊富な事例が確認されているのである。これらの墓碑の分析を通じて、被葬者である外国人の自己認識のあり方や、その通時的な傾向・変化を浮き彫りにすることが期待されよう。社会と自己に向けられた「外国人のまなざし」と、外国人に向けられた「市民のまなざし」との相互関係の解明によって、アテナイ社会の実態は従来よりも明確に理解できるであろうと思われる。

本発表では、外国人墓碑の網羅的な分析に基づいて、外国人の自己認識の問題に取り組む。その際には、文字だけではなく碑文の形状や占める空間などの情報も加味して、一つのモニュメントとして墓碑を総合的に扱う視点に立ち、また市民の墓碑との比較にもできる限り配慮をする。今回の発表では特に、(1) 被葬者の出身地 (2) 墓碑の設置場所 (3) 墓碑における言語の選択、以上の 3 つの傾向について通時的な変化が見られることに注目して考察する。その結果として、上述の、特に前 4 世紀中葉以降における「市民のまなざし」の変化を追うようにして徐々に、特定の地域出身の外国人が、しばしば居留外国人（メトイコイ）としてアテナイへの定住の道を選択するようになっていたこと、彼らは、自分の出身地やその慣習に強い愛着を持ちながらも、他方で住民としてアテナイの慣習と折り合いをつけ、社会への同化を図っていたことを明らかにする。もちろん、外国人としての立場からの自己主張という側面にも留意すべきであろうが、時代状況に応じて、彼らもまた市民との間に柔軟な関係性を築こうとしていたことがうかがえるのである。

## 後期プラトンにおける神の役割

——魂の浄め・神まねび・神への奉仕に見る敬虔概念の展開

齊藤 安潔

プラトンが哲学の理想をソクラテスに求めたのは間違いないが、ソクラテスが哲学

を神への奉仕と見なしたのに対して（『弁明』23B）、プラトンは『パイドン』では物質や感覚からの魂の浄めと見なしている（67C, 69C-D）。こうした差異について、McPherran（*The Religion of Socrates*）は両者では人間の知的能力に対する認識が異なっているため、神々と人間の関係、つまり敬虔の概念についての差異が生じてくるとしている。前者では無知なる人間が人間並みの知識を持つ者として完全な知識を持つ神々に奉仕するが、後者では人間が完全な知識であるアイデアを認識し、神々の仲間入りをすることが目指されるのである。ソクラテスの敬虔からすれば、プラトンの敬虔は *hybris* ということになる。

ところが、後期の『テアイテトス』では神まねびという考えが登場する（176B）。アイデアではなく神を善の基準として定めるこの考えは、Sedley（‘*The Ideal of Godlikeness*’）が指摘するようにソクラテス的な態度であり、*hybris* の危険を回避するものである。とはいえ、プラトンは魂の浄めとしての哲学という考えを捨てたわけではない。『ティマイオス』では人間は宇宙を律する神の知性の働きを観察し、地上的なものによって損なわれている知性を神のそれに似せて本来のあり方に戻さなければならぬとされており（89E-90D）、ここでは神まねびが魂の浄めと一致するものとして考えられている。さらに、『法律』においてはソクラテス的な神への奉仕との統一が図られることとなる。この宇宙は知性ある神々によって秩序づけられており、人間もその一部として宇宙の善に寄与しなければならない。『ティマイオス』で確認されたように人間は魂に知性的部分を持つがゆえに神々と同族関係にあるだけでなく、宇宙とも生まれを共通にするため、部分としての人間が善く生きることが宇宙全体の善につながり、人間を含む宇宙全体を最善に保とうとする神への奉仕となる（903B-904C）。ここでは、世界を知性によって秩序づける神々という考えに加えて、世界と人間の成り立ちを語る宇宙論が重要な意味を持っている。すなわち、人間がどのような本性を持ち、どのように世界の内に位置づけられるのかが示されることによって、魂の浄め、神まねび、神への奉仕が一致するものとして理解されることになるのである。

このようにプラトンは宇宙論を背景として魂の浄め、神まねび、神への奉仕という異なったものとして捉えられうる考えをむしろ一致するものとして示すに至ったと考えられる。本発表においてはこれらの考えを手がかりとして、前期対話篇における敬虔概念が哲学的探求と結びつく形で後期対話篇の内に表されていること、その際に宇宙論が大きな役割を果たしていることを示す。それにより前期から後期にかけての敬虔概念の展開と、後期において神がどのような重要性を持つのかを明らかにすることができるだろう。

ルティリウス・ナマティアヌスとクルスス・プブリクス  
——後期ローマ帝国における公的伝達システム運用の一側面——

南雲 泰輔

本報告は、後期ローマ帝国におけるクルスス・プブリクス（公的伝達システム。以下 CP）の運用状況の一端を解明するため、5世紀の詩人ルティリウス・クラウディオウ

ス・ナマティアヌスによる『帰国』(De reditu suo sive Iter Gallicum)の分析を中心として、特に「蛮族」の侵入以後のローマ帝国西部において道路網やCPがどのような状態にあったかという問題について考察を試みるものである。

4世紀後半から始まるいわゆる「蛮族」の侵入は、410年8月24日、王アラリックに率いられたゴート族による「永遠の都」ローマ市の劫略において、ひとつの頂点を迎える。この410年の事件が、かのキリスト教司教アウグスティヌスをして『神の国』執筆を決意せしめたことは周知のごとくであるが、彼自身は事件の報を北アフリカにおいて耳にしたのであって、ローマ市を襲った惨禍を自ら体験したのではなかった。もとより410年の事件の詳細を直接に証言する史料は乏しいが、劫略直後のローマ市及びビタリア半島の状況については、これを実地に見聞した可能性が高いルティリウスが、『帰国』において描写していることが注目される。ルティリウスは、生没年は不詳であるがガリアの貴族家系出身で、412年に当時ラヴェンナ市に所在したホノリウス帝治下の帝国西部宮廷で官房長官となり、414年にはローマ市行政の最高責任者であるローマ市長官に就任した。417年頃(年代には諸説有り)、ルティリウスは、ガリアに所有する自らの所領が「蛮族」の侵入によって荒廃したため、ローマ市から海路で故郷ガリアへと帰還せんとする。その旅程についてエレゲイアの韻律により記録した作品が『帰国』である。

この作品は学説史上において、詩中に含まれたローマ市への讃辞・ユダヤ人及びキリスト教修道士に対する批判・「蛮族」出自の武官スティリコに対する批判の三点が主要な検討対象とされてきたが、本報告ではこれら先行学説の着眼点とは異なり、この作品をローマ帝国の道路やイタリアの地誌を学ぶために読んだと述べたエドワード・ギボンの顰に倣って、『帰国』の主題たるルティリウスの帰途そのものを取り上げる。ローマ帝国の道路網及びその運用のための制度たるCPは、かつてローマ市を中心に帝国各地を相互に結びつける重要なインフラであったはずであるが、ルティリウスがガリアへの帰還にあたり、この道路網を使用せずあえて海路を選択したことや、船旅の途次ピーサエに立ち寄った折のCP運用の描写などの分析からは、当該時期の帝国西部において道路網やCPが「蛮族」の侵入からいかに深刻な影響を被ったか、また帝国西部の行政がいかに弛緩しつつあったかが如実に知られるのである。そして、かかる観点から考察を行なうことで、「蛮族」の侵入の評価に関する近時の学界での議論に対してひとつの問題提起をも試みたい。

## プロティノス感覚論における非受動と共受動

西村 洋平

プロティノスの魂論を特徴づけるのは、「非受動性」(ἀπάθεια)という概念である。魂が非受動であるとは、魂が物体とは異なり不滅であることを意味する。この概念は、幸福論においてだけでなく、認識論の文脈でも重要な位置をしめる。本発表では、後者の認識論、とりわけ感覚論に焦点を絞り論じる。

プロティノスは感覚について論じるとき、感覚が受動（πάθη）でないと主張するが（26 [III, 6], 1）、他方、魂と可感的対象の間に共受動性（συμπάθεια）が成立するとも述べる（29 [IV, 5], 1）。魂自身は非受動のままとどまり、感覚がそれをとおして可感的対象を把握する感覚器官が受動するというのが、彼の基本的立場である（cf. 28 [IV, 4], 23）。

背景にあるのは、アリストテレスやストア派の議論である。アリストテレスは『生成消滅論』（I, 7）のなかで、受動（πάσχειν）の条件として、作用するものと受動するものが同じ素材をもつか、同じ類であることを挙げる。この考え方に基づいて導入されるのが、ストア派が自然学のなかで発展させた共受動である。ところが、プロティノスにとって魂は素材をもたない知性的実体であり、感覚の対象である物体は素材と形相が合わさった可感的実体である。つまり、この二つは共通の素材をもたないように思われる。このことから、魂は物体の作用をいかなる仕方でも受けないと主張される。当然、問題は非物的な魂が非受動のまま、どのようにして共受動をとおして可感的対象・物体を感覚できるのかであろう。

感覚器官に生じる「受動」（πάθη）をめぐるのは、二つの異なる解釈がされてきた。ブルメンタールの解釈によれば、それは感覚器官という肉体に生じる物理的な作用だという。他方、エミルソンは、ブルメンタールの説を批判しつつ、この特殊な「受動」を、物体がもつ性質と、魂がもつ概念のような形相の中間にある、ある種の形相として理解する。まず、プロティノス研究の第一人者である両者の説と、彼らが挙げるテクストを吟味し、この問題を整理したい。

私はブルメンタールの立場では問題が解決されないと考えるが、物体の性質と魂の間に第三のものを導入するエミルソンの解釈も、プロティノスに即したものだと思わない。そこで、第17論考「実体あるいは性質について」（II, 6）や第44論考「存在の諸類について 第3編」（VI, 3）を中心に、プロティノスが可感的対象をどのような存在と理解しているのか明確に示したい。彼の魂論・感覚論にはアリストテレスやストア派の影響が見られるが、魂や可感的対象の存在理解はプラトン主義的である。本発表では、そうした複雑な伝統に根ざすプロティノス感覚論における、魂の非受動と共受動の問題解明をめざす。

## 境界を越える翼——ギリシア神話における神の翼の意味について

浅川 英理子

ギリシアの神話では、イーリスやニーケー、エロース、そしてまたヘルメースといった翼を持つ神々が登場する。なぜその神々には翼があるのだろうか。翼は言うまでもなく、本来鳥が持つものである。翼は鳥の持つ、飛翔、素早さ、上昇・下降、といった能力と関連する。本発表では、この翼を持つ神々の能力と、翼の属性との関連を考察し、ギリシアの神話での神々が持つ翼の意味を検討する。

翼を持つ神は、伝令として神意を伝える役割を果たす者がその主なものとしてあげられる。イーリスは「黄金の翼のイーリス」（II. 8.398）と形容されるように、翼を持つ

神として考えられるが、その役割は主にゼウス、そしてヘーラーの伝令である。風のように速いと形容されるのは、翼が風を捉えてすばやく飛翔する様に由来するのであろう (*Hymn. Apoll.* 102-114)。イーリスは神々の間の伝令 (*Il.* 8.398-425, *Hymn. Dem.* 314-324) だけではなく、人間の世界にも神の意思を伝えて飛翔する (*Il.* 11.185-210, 18.165-202, 24.143-188, *Aristoph. Aves.* 1202-1259)。また、ステュクスの水を汲むためにも送られるという (*Theog.* 784-787)。

ヘルメースもまた、ゼウスの意思を伝える伝令として考えられていた。ヘルメースの場合は、翼のある帽子やサンダルを身につけているとされ、すばやく移動して神の意志を伝える。その行く先は、神々の世界から人間の世界、そして冥界までも広がっている (*Il.* 24.339-469, *Od.* 24.1-14, *Hymn. Dem.* 335-383)。また人間が冥界へ赴く際の導き手 ( $\psi\chi\omicron\pi\omicron\mu\pi\omicron\varsigma$ ) とも考えられていた (*D. S. I.* 96, *Plu.* 2.758b)。さらに、神々と人間とに恋と欲望を送るエロース、人間たちに勝利という形で神意を届けるニーケーも、翼を持つ姿で想像された。このように翼を持つ神々が、神々の世界から、人間の世界、そして死者の世界にまで自由に境界を飛び越えていくのは、翼による飛翔力と関連があると思われる。

またその他、冥界に関連のあるゴルゴーンやエリーニユスたちも、翼を持つと考えられていた。遺体を運搬するヒュプノスとタナトスも翼のある姿で描かれる。これは本来、翼を持つ鳥たちは、死のイメージとも結びついていたためであろう。猛禽類は、上空から急降下してきて、地上の獲物に死をもたらす。また、鳥は死骸をついばむものでもある。ハルピュイアやスピックスといった、死をもたらす怪物たちに翼が生えているのはその死のイメージの象徴と考えられる。つまり、翼は死のイメージとそれに対する畏怖にも関連する。

このように、翼は地上と冥界を結びうるものであり、また上空から降下して地上に達することにより、境界を越えて天界ともつながる。また翼は、人間には到底できないすばやさで、地上のポリスの境界や、バルバロイとの境界も、陸地も、海も、軽々と超えていく。ギリシアの神話では、こういった翼を神々が持つことによって、境界を越え、神と人、生者と死者とをつなぐイメージが重ねられていったのではないだろうか。以上の点について、なお検討を加えていきたい。

## アゴラクリトス作《ラムヌスのネメシス》

芳賀 京子

ラムヌスはアッティカの東沿岸部の北部に位置するデモスである。その位置ゆえに、前5世紀末以降は次第に堅固な城壁が築かれ、兵士が駐屯する要塞としての性格を強めていく。それに先立つ前430年頃、この町の外の街道沿いに位置するネメシス神域に新しい神殿が建設され、神殿内には巨匠フェイディアスの弟子アゴラクリトスの手になる巨大なネメシス女神の大理石製礼拝像が安置された。これは「大きさにおいても美しさにおいてもたいへん立派な出来であった」(*Strab.* 9.396)。像容や台座の図像については、パウサニアス (1.33.2-8) が例外的なまでに詳しい記述を残している。そ

して何より幸運なことに、非常に断片的とはいえ、この礼拝像はオリジナルが現存しているのである。神像本体の断片は、デスピニスの研究によってローマ時代につくられた幾体ものコピーと結びつけられ、彫像タイプが確定された (Γ. Δεσπίνης, *Συμβολή στη μελέτη του έργου του Αγορακρίτου*, Athens 1971)。細かなパズルのような無数の台座の断片は、ペトラコスによってある程度の読解が可能なまでに実際に組み上げられた (B. X. Πετρόκος, “Προβλήματα της βάσης του αγάλματος της Νεμέσεως”, in: H. Kyrieleis ed., *Archaische und klassische griechische Plastik*, 2, Mainz 1986, pp. 89-107)。だがせつかく復元された台座はいまだ遺跡倉庫に置かれたまま一般には公開されておらず、そのためか礼拝像についての議論は進んでいるとは言いがたい。

パウサニアスは台座浮彫の人物の名を挙げているが、端から順番に言及しているわけではなく、全員の名を記しているわけでもない。そのため、実際に台座に残されている 14 体の人物像と 2 頭の馬がパウサニアスの記述とどう対応するのか、研究者の意見は一致しておらず、台座の三面の浮彫 (背面は浮彫なし) が何を意味しているのかもわかっていない。そこでまず、浮彫を詳細に観察してジュスチャーを分析し、パウサニアスの記述と照らし合わせることで人物像の名を確定する。すると、台座前面とむかって右の側面にはネメシスという女神の人間世界への顕現と運命の正しい再分配 (トロイア戦争後の秩序の回復) が表されており、左側面にはこの土地への言及がなされていることが読み取れる。一方、女神像本体の像容は、世界の東西の果てへの女神の威光を暗示している。このネメシス像がラムヌスというアテナイの東国境を正しい秩序へと導く女神として、つまり国境鎮護の女神として構想されていることを示すことにしたい。

## 「異」教女性聖人ヒュパティア：その「神のごとき魂」について

足立 広明

413 年、キュレネ主教シュネシオスは、師ヒュパティアから便りがなくことをいぶかしみ、手紙を書いた。彼は子どもを失い、友人も失って苦境にあるが、「最大の打撃は、あなたの神のごとき魂の (τῆς θειοτάτης σου ψυχῆς) 導きが消えたこと」であるとしたためる。

ヒュパティアは、最後の「異」教知識人として名高い。同時代の教会史家ソクラテスによると、彼女はアレクサンドリア総主教キュリロス支持派のキリスト教徒の暴徒によって、四肢を引き裂かれて殺害されたという。彼は「この行為は少なからぬ不名誉を、キュリロスのみならず、全アレクサンドリア教会にもたらした」と述べている。6 世紀のダマスキオスも、「この出来事の記憶は今なおアレクサンドリアの人々の間で鮮明である」と記した。

18 世紀の啓蒙主義の時代、ジョン・トーランド、ヴォルテール、エドワード・ギボンらが狂信の無辜なる犠牲者として彼女を強調した。19 世紀になるとチャールズ・キングズリの小説やルコント・ドゥ・リルの詩でヒュパティアの名は広く人口に膾炙し、科学史でもガリレオと並んで教会に迫害された天文学者、数学者として注目されるに至った。この傾向は現在まで続き、2009 年には彼女を主人公とする映画も制作され、

話題を呼んだ。

しかし、近年の古代末期研究においては、「異」教対キリスト教という2項対立の図式は見直される傾向にある。ピーター・ブラウンは対「異」教迫害が啓蒙主義の伝統のなかで誇張されてきたと指摘したし、ヒュパティアに関してもアラン・キャメロンがその神話化を剥ぐ試みを行っている。彼の下で学んだマリア・ジェルスカは、対立はあくまで政治的なものとし、「殉教」以前のヒュパティアの知的サークル自体の分析に目を向けた。史料を見てもキリスト教徒は一枚岩ではなく、キュリロスの党派に距離を置く人々がソクラテスやダマスキオスの記す記憶を共有したのだと思われる。

報告ではこのような近年の傾向を踏まえ、さらに一步進めたい。それは、ヒュパティアが同時代のキリスト教女性聖人と共通する特徴を備え、それによって社会的名声を高めた可能性を探ることである。ダマスキオスによると、彼女は自分に恋焦がれる弟子に生理を処理した布を見せてあきらめさせたという。伝説に属するとしても、この説話はある重要なメッセージ、すなわち、彼女がこの世の男性との性的関係を断ち、神への接近によって自らを完成させようとする者であったことを伝えている。シュネシオスもまた、彼女のこのような「神のごとき魂」に導かれていたのであろう。キュリロスが彼女を恐れたのも、まさにこの点ではなかったか。2元論的発想からこれまでの研究が見落としてきたヒュパティアの横断的側面—同時代のキリスト教女性聖人と共通する特徴を持ち、「異」教徒もキリスト教徒も同時に引きつけていった—を。史料と時代背景から分析する。

### キュンティアの亡霊

#### ——プロペルティウス第4巻第7歌について——

日向 太郎

プロペルティウスは、第3巻の終わりを飾る24歌および25歌において、恋人キュンティアとの決別を宣言する。同時に、それまで中心に扱ってきた彼女との恋愛も、文学的主題としては一旦棄却する。実際、後続の第4巻においては、ローマの故事来歴や同時代の出来事を主に扱うようになった。ところが、その第7歌（以後4.7）に至って状況は再び一転する。恋人は亡くなり、その亡霊が自身の枕元に現れたと詩人は歌っているのである。状況設定を含む最初の12行（1-12）と結びの2行（95-96）を除く82行（13-94）は、詩人の不実を嘆くキュンティアの言葉である。たしかに詩人は、第1巻から第3巻まで、彼女との恋愛を自己の文学の中心主題としてきたが、これ程直接的かつ長大に彼女の声を伝えることはなかった。何よりもまずそのような点で4.7は特異であり、詩集全体のなかでも際立っている。プロペルティウスの文学を理解する上で、当然鍵となる重要な歌である。

しかし、4.7も難解なプロペルティウス作品の例外ではなく、小さからざる解釈上の問題を含む。なかでも、*pelle hederam tumulo* (79)については、Sandbachが写本の読み *pelle* に代わる *pone* を修正案として提示し、これが近年多くの支持者（Fedeli、Dimundo、Goold、Heyworthら）を得ている。蔦は詩に所縁の深い植物であり、ギリ

シアのエピグラムにも墓に蔦を這わせる慣習を認め得る。文学的常套を考慮すれば、写本の読みに従った「墓から蔦を払え」というキュンティアの要求は、奇妙に見えるかも知れない。だが、その直前の 77-78 で、彼女は自分を歌った詩を焼き、自分を称賛することを止めるよう要求している。また、直後の 81-84 は埋葬のやり直しを指示しているようにも思われる。つまり、pone は前後の文脈には適合しないのである。本考察では、pelle の読みを守るべきだと判断し、それを根拠づけるためにも、4.7 がいかなる構想の上に成り立つ歌であるかを見極める。

4.7 のキュンティアとプロペルティウスとの関係は、『イーリアス』第 23 歌のパトロクロスとアキレウスの関係を連想させるが、同時に 4.7 はプロペルティウス自身の前作への言及をも含む。その状況設定は彼女の誕生祝いを題材にした 3.10 を想起させ、彼女の永遠の美と支配を希求した詩人の願望の空しさを露呈する。また、2.13 や 3.16 など詩人は自身の理想的な葬儀を思い描いたが、4.7.21-34 では彼自らその理想に離反したことが非難される。続く 35-48 では、恋愛詩を象徴するような王国 (regna) が、まさに詩人自身の責任で崩壊したことに思い至らせる。生前不実だと責められたキュンティアは、49-70 で 3.19 や 2.28 の詩行を仄めかしつつ、その見当違いを指摘し、むしろ自分こそが真の愛を全うしていることを訴える。キュンティアの言葉は、プロペルティウスが恋愛詩人としての地位を失っていることを明らかにする。それは、過去を振り返る詩人自身の内なる呵責の具現である。

## ソクラテスの最後の言葉

金山 弥平

すでにほとんど下腹部の辺りまで冷たくなっていましたが、そのときあの方は、顔の覆いを除けて—それまで覆われていたのです—言われました。実際、これがあの方が発せられた最後の言葉でした。「クリトン—あの方は言われました—われわれはアスクレピオスに雄鶏一羽の借りがある。(君たちが) かならず返してくれるように。おろそかにしないように。「きっとそうするよ—クリトンは言いました—だが、ほかに何か言うことはないかね?」。こうクリトンは尋ねましたが、あの方はもう何も答えられませんでした。(『パイドン』118A5-11)

三度も繰り返される「語る」関係の言葉—「言われました」、「発せられた」、「言われました」—は、これが、実際のソクラテスの言葉であったことを示唆する(毒人参がプラトンの記述する静かな死をもたらしたかという問題は、Bloch (Brickhouse and Smith (edd.), *The Trial and Execution of Socrates*, 2002, 255-78; also <http://nd.edu/~plato/bloch.htm>) によって解決されたものとみなす)。医神アスクレピオスの癒しに対する彼の感謝は、何に関わるものなのか? この問題解決に向けてさらに問われるべきは次の問いである。(A) なぜ、もっと早い時点でソクラテスはクリトンに頼まなかったのか? (B) クリトンは、説明がまったくなくてもソクラテスの意図を理解できたのか? (C) なぜほかならぬクリトンに頼んだのか? (D) なぜ、例えば

アポロンではなく、アスクレピオスに感謝するのか？ (E) なぜ、ソクラテスだけでなくクリトンも含めた「われわれ」の借りなのか？ (F) なぜ、クリトンだけでなく「君たち」による捧げものを、ソクラテスは願ったのか？

感謝の対象の問題については、Peterson (Reshotko (ed.)), *Desire, Identity and Existence*, 33-52)は2003年の時点で、自身の解釈以外にすでに23もの解釈を数えていた。本発表ではそうした解釈のうち、(a) 言論嫌い (86Cff.) からのソクラテスの仲間の癒し、(b) この世の生という病からのソクラテスの癒し、(c) 心身ともに健康にソクラテスが一生を送りえたこと、(d) アテナイ全体の癒し、(e) ソクラテスがげんに体験している安らかな死、(f) ソクラテスに身近なある特定の人物の具体的病の癒し—— (1) ソクラテス自身、(2) ソクラテスの家族、(3) プラトン——、を扱う。本発表が支持するのは (f3) である(プラトンの病については59Bを参照)。この解釈はすでに *Most (Classical Quarterly, 96-111)* が1993年に提唱したものであるが、しかし *Most* は、どのようにしてソクラテスがプラトンの癒しを知りえたのかという問題に直面し、死を前にして与えられる予言の力 (85B) に訴えざるをえなかった。本発表では、予言の力を持ち出すことなく、(A)～(F) に最もよく答えうる (f3) の新解釈を示す。本発表を通して、『パイドン』全体に認められる種類の円環的構造を、よりいっそう際立たせるとともに、理性による感情の制御を重視するいささか冷淡な人間としてソクラテスを解釈する傾向に対して、友人や家族の心情に細やかな配慮を注ぐソクラテス像を浮かび上がらせるつもりである。